

1



若手アカデミー（第24期）発足（平成29年12月28日）



三成副会長と記念撮影する若手アカデミーメンバー

(埴淵メンバーによるデザイン)



代表

岸村顕広



副代表

新福洋子



幹事

岩崎渉



幹事

高瀬堅吉

63名で活動中

3

日本の若手アカデミー（YAJ）の活動：分科会がメイン

若手のための、あるいは、次世代としての活動を”異分野連携の下に”行う。

- ① ③ (1) 若手科学者の視点を活かした提言
- ② (2) 若手科学者ネットワークの運営
- ① ② (3) 若手科学者の意見収集と問題提起
- ④ (4) 若手科学者の国際交流
- ③ (5) 産業界、行政、NPO との連携
- ① ② ③ ④ (6) 科学教育の推進
- ③ ④ (7) その他目的の達成に必要な事業

広報など

若手アカデミー運営要綱より

①若手による学術の未来検討分科会
(役員：川口慎介、平田佐智子、中村征樹、埴淵知哉)

②若手科学者ネットワーク分科会
(役員：酒折文武、岩崎 渉、井頭麻子、前川知樹)

③イノベーションに向けた社会連携分科会
(役員：高山弘太郎、高瀬堅吉、上村想太郎、谷内江 望)

④国際分科会
(役員：新福洋子、西嶋一欽、中西和嘉、安田仁奈)

- 基本的に縦割りの構造は取らず課題別にグループを設定（多様性と機動力を確保）
→従来の『分野別』では解決困難な課題に柔軟に対応
- 次の時代に対して責任を取るべき世代としての自覚を持った活動
- 『高度かつ多様な次世代人材のプール』として社会への窓口・ハブとして機能

若手による学術の未来検討分科会

5

委員長 副委員長 幹事
川口慎介 平田佐智子 埴淵知哉 中村征樹



【若手アカデミーの活動内容】

- (1) 若手科学者の視点を活かした提言
- (2) 若手科学者ネットワークの運営
- (3) 若手科学者の意見収集と問題提起
- (4) 若手科学者の国際交流
- (5) 産業界、行政、NPO との連携
- (6) 科学教育の推進
- (7) その他目的の達成に必要な事業

学術環境が劇的に変化する中、学術界を取り巻く現状の認識を深めながら、来る時代における学術の有り様を検討することが求められる。学術の未来を担う若手科学者の置かれた現状を分析し課題を解決する方策を検討するとともに、学術の発展により獲得される新たな自然理解が社会をどのように変容しうるかを検討する。

メンバー（23名：平成30年7月4日現在）

氏名	所属・職名	氏名	所属・職名
伊藤 恵理	国立研究開発法人海上・港湾・航空技術研究所電子航法研究所主幹研究員	實藤 和佳子	九州大学大学院人間環境学研究院准教授
上田 泰己	東京大学大学院医学系研究科 機能生物学専攻教授	武田 宙也	京都大学大学院人間・環境学研究科准教授
内田 さやか	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻准教授	谷口 洋幸	金沢大学国際基幹教育院准教授
遠藤 求	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究領域教授	土屋 太祐	新潟大学人文社会・教育科学系（経済学部）准教授
大矢根 綾子	産業技術総合研究所ナノ材料研究部門主任研究員	所 裕子	筑波大学大学院数理物質科学研究科准教授
隠岐 さや香	名古屋大学大学院経済学研究科教授	中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構准教授
川口 慎介	国立研究開発法人海洋研究開発機構研究員	福永 真弓	東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授
河原林 健一	国立情報学研究所教授	馬奈木 俊介	九州大学大学院工学研究院教授
岸村 顕広	九州大学大学院工学研究院応用化学部門・九州大学分子システム科学センター准教授	村上 祐介	九州大学大学院教育学研究科准教授
木村 周平	筑波大学人文社会系助教	森 章	横浜国立大学環境情報研究院准教授
		埴淵 知哉	中京大学国際教養学部教授
		平田 佐智子	専修大学兼任講師
		谷内江 望	東京大学先端科学技術研究センター合成生物学分野准教授

- ①学術への期待と課題（若手から/若手へ）
- ②科学者のあり方、ライフワークバランス
- ③人文社会科学の未来
- ④発展する自然理解とその社会との対話

6

学術の未来検討分科会・24期活動プラン

中心的に取り組む内容

1. 研究者のライフワークバランス

学術界全体での「ワーク過剰」こそが原因であるという立場を取り、業界内でのワークの見直しに取り組む。

2. 依然解決しないポストク問題・ポスト問題

減り続けるアカデミックポストと増え続ける博士号取得者との折り合いを付ける必要がある。

3. 発展する自然理解とその社会との対話について検討。

目標/起こすべき行動

1. 学会活動にかかる負担を評価する。

学会活動の負担が増大している感慨を抱く研究者は少なくない。学会活動にかかる負担について、データおよび質的評価の両面から調査・議論し、改善案を構築・提案する。

2. アカデミア以外の機関が博士持ちに期待することを明確にし、活躍の場を増やす方策を探る。

→その期待を裏付けることができるか。裏付けに必要な事項は何か？

3. 社会でも頻出する抽象的なテーマを話題に、各分野の学問からの見解を問いつつ深掘りする場を持ち、社会と対話する。

方法/プロセス

1. 科学者委・学協会連携分科会の活動と合わせ、国内の学協会について統計情報を収拾・評価する。
2. 10月に博士取得者のキャリアに注目したシンポジウムを開催。学術の動向での特集も検討。
3. 分科会で実験的議論を重ね、シンポジウム開催を目指す。

委員長 酒折文武 副委員長 岩崎 渉 幹事 井頭麻子 前川知樹



【若手アカデミーの活動内容】

- (1) 若手科学者の視点を活かした提言
- (2) 若手科学者ネットワークの運営
- (3) 若手科学者の意見収集と問題提起
- (4) 若手科学者の国際交流
- (5) 産業界、行政、NPO との連携
- (6) 科学教育の推進
- (7) その他目的の達成に必要な事業

広く内外の若手科学者との連携を図り、
国内の若手研究者のネットワークを形成・維持することを通じて、若手科学者の抱えている意見の収集や若手科学者への問題の提起を行う。このような観点から、
各種学協会との連絡窓口とし、相互の意見交換に関する以下の事項等を審議する：

- ① 若手科学者ネットワークの運営に関する事項
- ② 若手科学者の意見収集と問題提起に関する事項

発足メンバー（18名：平成30年7月5日現在）

氏 名	所 属 ・ 職 名	氏 名	所 属 ・ 職 名
荒木 稚子	埼玉大学大学院理工学研究科准教授	大門 高明	京都大学大学院農学研究科教授
井頭 麻子	明治学院大学法学部消費情報環境法学科准教授	高瀬 堅吉	自治医科大学大学院医学研究科教授
井藤 彰	九州大学大学院工学研究科准教授	竹村 仁美	一橋大学大学院法学研究科准教授
岩崎 渉	東京大学大学院理学系研究科准教授	谷口 洋幸	高岡法科大学法学部教授
岩永 理恵	日本女子大学人間社会学部社会福祉学科准教授	前川 知樹	新潟大学歯学部総合研究科高度口腔機能教育研究センター研究准教授
宇南山 卓	一橋大学経済研究所准教授	松中 学	名古屋大学大学院法学研究科准教授
加藤 千尋	弘前大学農学生命科学部助教	安田 仁奈	宮崎大学准教授
住井 英二郎	東北大学大学院情報科学研究科教授	酒折 文武	中央大学理工学部数学科准教授
田井 明	九州大学大学院工学研究科環境社会部門准教授	平田 佐智子	専修大学兼任講師

若手科学者ネットワーク分科会・24期活動プラン

中心的に取り組む内容

- ① 若手科学者ネットワークの運営
- ② 異分野の若手科学者が分野を越えて意見交換できる場の提供
- ③ 若手科学者の意見収集と問題提起

目標/起こすべき行動

- ① アニュアルレポートの作成
- ② 若手科学者サミットの開催
- ③ 若手科学者ネットワークを活用した意見収集

方法/プロセス

- ①、③：若手科学者ネットワーク、及び、若手アカデミーそのものの周知も進めて、機能強化する。
- ②：若手科学者サミットを開催。異分野の交流のみならず、行政官などセクターの異なる方との議論の場を提供する。

イノベーションに向けた社会連携分科会

委員長 副委員長 幹事
高山弘太郎 高瀬堅吉 上村想太郎 谷内江望



【若手アカデミーの活動内容】

- (1) 若手科学者の視点を活かした提言
- (2) 若手科学者ネットワークの運営
- (3) 若手科学者の意見収集と問題提起
- (4) 若手科学者の国際交流
- (5) 産業界、行政、NPOとの連携
- (6) 科学教育の推進
- (7) その他目的の達成に必要な事業

科学技術イノベーションをめぐる大変革時代が到来する中、学術には、社会との連携を深めながら、広い視野に立って検討することが求められる。そこで、多様な学術分野の若手科学者から構成される若手アカデミーの下に分科会を設置し、ウェブサイトや出版を通じた社会への**広報活動**と、地方を含めた我が国全体の**学術・行政・産業・NPOなどの関係者との交流活動を通じて、若手科学者による社会連携を推進するとともに、社会連携のあり方や科学技術イノベーションの社会実装など、学術と社会の関係について検討**を行う。

構成メンバー（19名：平成30年度年7月5日現在）

氏名	所属・職名	氏名	所属・職名
有路 昌彦	近畿大学世界経済研究所（水産・食料戦略分野）教授	高山 弘太郎	愛媛大学大学院農学研究科教授
岩村 誠	日本電信電話株式会社主任研究員（特別研究員）	遠野 雅徳	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構畜産研究部門主任研究員
上村 想太郎	東京大学大学院理学系研究科教授	豊田 光世	新潟大学朱鷺・自然再生学研究センター准教授
遠藤 良輔	大阪府立大学大学院生命環境科学研究科講師	名取 良太	関西大学総合情報学部教授
笠井 久会	北海道大学大学院水産科学研究院准教授	野田 岳志	京都大学ウイルス・再生医科学研究所教授
川畑 秀明	慶應義塾大学文学部准教授	林 秀弥	名古屋大学大学院法学研究科教授、同アジア共創教育研究機構教授（学内兼任）
小堀 聡	名古屋大学大学院経済学研究科准教授	春日 郁朗	東京大学大学院工学系研究科准教授
小森 大輔	東北大学大学院環境科学研究科准教授	平田 佐智子	専修大学兼任講師
高瀬 堅吉	自治医科大学大学院医学研究科教授	谷内江 望	東京大学先端科学技術研究センター合成生物学分野准教授
高槻 泰郎	神戸大学経済経営研究所准教授		

イノベーションに向けた社会連携分科会・24期活動プラン

中心的に取り組む内容

科学技術イノベーションをめぐる大変革時代が到来する中、社会との連携を深めながら、広い視野をもった学術のあり方を検討する必要がある。一方、若手科学者の社会連携への参画は活発ではない。

キーワード：

シチズンサイエンス、サイエンスコミュニケーション、SDGs（持続可能な開発目標）、Society 5.0、PRISM（官民研究開発投資拡大プログラム）、地方、若手科学者における社会連携活動、産学連携

目標/起こすべき行動

学術の社会連携や科学技術イノベーションの社会実装への若手科学者のアプローチの仕方を検討し、若手科学者による社会連携を推進する。

- ①シチズンサイエンス、SDGs、Society 5.0、PRISMに関連するシンポ企画・提言・報告の準備（分科会3回/年）での学習会
- ②シンポジウムの開催（2018年7,12月、2019年3月〔予定〕）
- ③シンポジウム・分科会の検討結果をまとめた提言・報告等の原案作成（2019年度中）

方法/プロセス

- ①社会への広報活動は、ウェブサイトの機能強化や「学術の動向」などへの寄稿を通じて行う。随時、ネットワーク分科会との連携して行う。
- ②シンポジウム・分科会における勉強会を開催する。

国際分科会

委員長 副委員長 幹事
 新福洋子 西嶋一欽 中西和嘉 安田仁奈



【若手アカデミーの活動内容】

- (1) 若手科学者の視点を活かした提言
- (2) 若手科学者ネットワークの運営
- (3) 若手科学者の意見収集と問題提起
- (4) 若手科学者の国際交流
- (5) 産業界、行政、NPO との連携
- (6) 科学教育の推進
- (7) その他目的の達成に必要な事業

メンバー（14名：平成30年6月18日現在）

氏 名	所 属 ・ 職 名
荒木 稚子	埼玉大学大学院理工学研究科准教授
石井 香世子	立教大学社会学部現代文化学科准教授
狩野 光伸	岡山大学副理事・大学院ヘルスシステム統合科学研究科教授
川崎 昭如	東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻特任教授
岸村 顕広	九州大学大学院工学研究院応用化学部門・九州大学分子システム科学センター准教授
塩見 淳一郎	東京大学大学院工学系研究科機械工学専攻教授
竹村 仁美	一橋大学大学院法学研究科准教授
中澤 高志	明治大学経営学部教授
中西 和嘉	国立研究開発法人物質・材料研究機構主任研究員
西嶋 一欽	京都大学防災研究所准教授
松中 学	名古屋大学大学院法学研究科准教授
馬奈木 俊介	九州大学大学院工学研究院教授
安田 仁奈	宮崎大学准教授
新福 洋子	京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻家族看護学講座准教授

地球社会において日本の学術はどのような役割を果たすべきか。また他国における学術の状況と比較してわが国の学術をどのように進めていくべきか。これらを、今後20年以上にわたってわが国の学術を牽引するべき若手科学者の立場から考え、また世界各国に次々設立されている若手研究者を主たる構成員とする学術組織である若手アカデミーとの連携によって実践していくために、本分科会を設置する。本分科会では、既に関係の深い国際的若手学術組織であるグローバルヤングアカデミーへの参画を通じ、他国の若手アカデミーとの交流を深め、また我が国との交流連携を深めるための催しを考案開催する。分科会は世界規模の問題を解決するために行動しこの目的のため他国のアカデミーと共同して国際的発信を行う。

国際分科会・24期活動プラン

中心的に取り組む内容

1. 世界における日本のアカデミアのビジビリティの向上
2. 教育システムが脆弱な国や地域での人材交流
3. SGU（スーパーグローバル大学）の可視化と共有
4. 国際化に伴う大学のインフラ整備
5. 海外におけるデータ取得に関する障壁

目標/起こすべき行動

1. 世界の若手研究者との交流を通じ、日本の学術研究活動を周知するとともに発展につなげる。
2. 教育システムの脆弱な国における学協会・業界団体の役割を整理し、機能強化の協力をする。
3. 受験者がそれぞれのSGU大学の特色がわかるようにする。
4. 外国人受け入れ手続きを担当する大学職員・教員が他学の例を参照し、労なく手続きを執行できるようにする。
5. 研究者が複雑な国際法規で規定される現状を周知し、改善に向けた提案をする。

方法/プロセス

1. GYAとの連携やアジアでの連携、国際的イベントへの協力・参画。
2. 学協会・業界団体の役割について規程や方法を示すプロジェクトの立ち上げ。
3. それぞれのSGU大学の特色がわかるリスト（〇〇の研究なら△△大学、など）があるとよい。羅針盤的な資料の作成。
4. 仕組み作りが進んでいる大学からの情報収集、文科省のヒアリング。将来的に、英語化された書類を共有し、外国人受け入れ手続きメモなどをオンラインで共有する仕組みを作る
5. CITES機関登録で経産省等との情報共有、意見交換。若手アカデミー全体での連携も。